



LGBT についてどのような質問がなされてきたのか —性的マイノリティについての研究動向—

大塚 薫

成城大学大学院文学研究科コミュニケーション学専攻博士課程後期

kahoril106@yahoo.co.jp

(受理：2016年11月30日，採択：2017年3月5日)

要 旨

本稿は、日本とアメリカにおけるセックス（性行為）の調査のなかで、性的マイノリティやLGBTの人々の性行動や性意識がどのように扱われてきたのかという目的のもと、3つの大規模質問紙調査の質問文の分析を行った。その結果、「性的魅力」、「性的指向」、「性自認」、「性行動」、「性についてどう考えるか、性について知りたいこと」、「配偶関係、パートナーシップ関係、同棲関係」、「性的ないたずら」、「挿入する側、挿入される側」という8つの代表的な類型が見出された。質問の作成において異性愛が前提になっていること、継続的な調査における変化、同性愛に比べてトランスジェンダーに関する質問が少ないことが明らかとなった。

キーワード：セックスサーベイ、LGBTの性、セクシュアリティ、社会調査、質問紙調査

1-1 はじめに 問題意識

1992年にアメリカにおいて大規模なセックスサーベイである「国民健康社会生活調査」を行った Robert Michael たちは、性行動を研究することについて以下のように述べている。

性行動研究の模索の歴史は、その複雑さと膨らんだ期待、挫かれた希望とがからみ合う、悲喜劇の様相を呈している。それは、他人の性行為について、いささか混乱した考

えを導く歴史である。だからこそわれわれの調査班は、徒労とも思える作業の敢行に踏みきり、結果的には7年におよぶ日々を費やしてまで、ほかの社会的行動を対象とする場合と同じ手法で、性行動を研究してきたのである。(Michael, R. et al. 1994=1996: 18)

Robert Michael たちは、性行動を「ほかの社会的行動を対象とする場合と同じ手法」で研究してきたと主張する。彼らはセックスが研究されてこなかった理由として、「政府や民間の財団が、性の調査に対する資金提供に関心をもたなかったこと」(Michael, R. et al. 1994=1996: 19) あるいは「科学者自身のなかにも、セックスの調査はどこか汚らわしく、重要でもないし、危険さえはらんでいると感じ、このテーマに近づかない者が多かった」(Michael, R. et al. 1994=1996: 19) ということを指摘している。また、Janice M. Irvine によれば、1980年代頃までセクシュアリティを研究しているということで研究者たちが周りから攻撃さえも受けてきたという (Irvine 2003: 451-452)。このように、性行動について研究することは、「ほかの社会行動」を研究することと比較して、さまざまな困難をともなうものとして考えられてきた¹⁾。

一方、性的マイノリティやLGBTの人々の性についてはどうだろうか。現在までLGBTの研究は、社会学を始めとして多様な領域で研究がなされている。しかしながら、21世紀の社会学のLGBTの研究をレビューしたJoshua Gamsonは、LGBTのセックスそのものに関する研究は少ないという課題を指摘している (Gamson 2013: 808)。以上のことから、そもそも性行動研究が難しいなか、性的マイノリティやLGBTの人々の性に注目して研究することはよりいっそう難しいと言える。

1-2 LGBTの人々の生活と、そのなかの性

ここでは、LGBTの人々の生活、そしてその生活のなかのセックス(性行為)についての先行研究を整理していく。まずAlbert Reiss (1961)は、アメリカ社会の男性の売春における成人男性の客(adult male client/queers)と若い男の街娼(adolescent male hustlers/peers)の研究を行った。Reissは、12歳から17歳の少年に対するセックスヒストリー(Sex history)についてのインタビューと彼らの会合場所における社会観察を実施した(Reiss 1961: 104)。Reissによると、当時アメリカ社会においてペニスを口唇で刺激する(fellation)という行動は、性の非行(sex delinquency)の一つとして捉えられていた(Reiss 1961: 102)。Reissが調査した少年たちは、自身を街娼(hustlers)とも同性愛者(homosexual)としても定義していなかった。ほとんどの少年たちは自身のことを「getting a queer」と定義していたという²⁾。

また、Humphreys (1970)は、男性同性愛者の出会いの場としての公衆トイレ(tea room)において、「見張り役」(watch queen)として男性同性愛者の性行為を観察した。この観察から、出会いの場である公衆トイレに通う男性同性愛者の姿が明らかにされた。一方で、このフィールド調査は、倫理的な議論を喚起した有名な例である(Humphreys

1970)。彼は、公衆トイレに通う同性愛者の車のナンバーを情報源としてインタビュー実施までを行っている。この事例では、Humphreys は同意を得ずに性行為の観察調査を行うだけでなく、個人情報やプライバシーへの侵害も行ったと言える。性の調査の難しさ故であるとはいえ、性に関する質的調査のあり方に大きな波紋をなげかけた事例と言える³⁾。

また、金城 (2010) は、沖縄地域の男性同性愛者向けの出会い系掲示板の投稿文を言語学的視点から計量的に分析している。その結果、投稿者の 8 割が 20 代と 30 代によって占められており、出会いの形態としては性的な接触を望むものが最も多く、容姿その他への言及については体型に関する言及が最も多く、その内普通より大きい体型 (「固太り」, 「ガチデブ」等) に関する語彙が発達していること、表現の特徴としては願望を表す「たい」や「ほしい」(「ヌキたいやつ」, 「掘ってほしい奴」等) を用いた表現が約 4 割を占め、受益表現では「～てもらう」よりも「～てくれる」(「掘ってもらいたい」, 「しゃべらせてくれる人」等) という表現が多用されていることがわかった (金城 2010)。

一方、セックスにおける役割分担以外では、ゲイカップルにおける家事分担研究もある (神谷 2011)。神谷は、ゲイカップルの生活および関係性、ゲイカップルが抱える問題を明らかにすることを目的として、10 組の同性パートナーと同居するゲイ・バイセクシュアル男性に対して半構造化インタビューを実施した (神谷 2011: 75)。その結果、異性愛家族の家事分担の規定要因に関する枠組である「相対的資源説」, 「時間利用可能性論」, 「イデオロギー論」は、ゲイカップルの家事分担に対して一定の有効性を持つが、これらのみでゲイカップルの家事分担を説明することはできないこと、また、カップルのうち一方が家事に従事し、他方が仕事や生活費負担を遂行することが愛情表現とみなされるメカニズムはゲイカップルにおいて働いていないことが明らかになった。このようなメカニズムが働かないことはより平等な家事分担を促進することを神谷は示唆している (神谷 2011: 82-83)。

次に、LGBT の人々のライフヒストリーや LGBT の家族について取り上げる⁴⁾。矢島は、男性同性愛者 (矢島編 1997; 矢島編 2006)、女性同性愛者 (矢島編 1999) と女装者 (矢島編 2006) のライフヒストリーをまとめている。『男性同性愛者のライフヒストリー』では、20 代から 30 代の 20 人の男性同性愛者のインタビューを分析している (矢島 1997)。また『女性同性愛者のライフヒストリー』では、22 人の女性同性愛者 (主にレズビアン、バイセクシュアル、一部にはエイセクシュアル、トランスジェンダーを含む) のインタビューを分析している。

また鶴田 (2009) は、性同一性障害である人々に対してインタビューを実施した。その結果、「性別判断」の実践をすることの複雑さによって性同一性障害の人々が女らしさや男らしさに駆り立てられてしまうこと、「正当な性同一性障害」であるために「道徳的」な基準を設定してそれを満たすべく、よりいっそう人が女らしい女や男らしい男に向かって駆り立てられてしまうことの記述をすることによって、人が「女あるいは男であること」と「女らしく、あるいは男らしくあろうとすること」がどのように関係しているのかを明らかにした (鶴田 2009)。

最後に、マクロな視点のLGBTについての人口統計調査を取り上げる。今まで、主に欧米の調査においては、性的マイノリティの割合、アメリカにおける同性カップルの居住地、同性カップルにおける育児をしている割合、同性カップルの婚姻率、シビルユニオン登録率等が明らかにされてきた⁵⁾。

以上のように整理をしてみると、LGBTの人々の生活とそのなかの性については質的調査と量的調査において明らかにされてきたのだが、フィールドワークや観察、インタビューなどの方法を用いた質的調査がより多く用いられてきたとも考えられる。このことから、量的調査という観点から再考する必要があるだろう。本稿では、大規模な性の調査もしくは大規模なセックスサーベイに注目したい。そして、その大規模なセックスサーベイにおいて、LGBTの人々や性的マイノリティの人々がどのように取り上げられてきたのかを明らかにしたい。では、アメリカにおけるセックスサーベイ(2-1)と日本におけるセックスサーベイ(2-2)について整理をして、両者を通じて浮上した課題を示す(2-3)。

2-1 アメリカにおけるセックスサーベイ

まずはアメリカのセックスサーベイについて取り上げる⁶⁾(表1)。1930年代から1940年代にかけて、インディアナ大学の生物学者である Alfred Kinsey らによって大規模な性の調査が実施された。キンゼイたちは、1948年に男性のセクシュアリティについての『*Sexual Behavior in the Human Male*』(Kinsey et al. 1948=1950)を、1953年に女性のセクシュアリティについての『*Sexual Behavior in the Human Female*』(Kinsey et al. 1953=1955)を出版した。

次に、1992年には「国民健康社会生活調査」(NHSL: The National Health and Social Life Survey) (Laumann et al. 1994)が実施された⁷⁾。1980年代に流行したエイズがこの調査の発端となっている。調査を実施したのは、シカゴ大学の社会学者である Edward Laumann と John Gagnon, Robert Michael, Stuart Michaels 他である。シカゴ大学の国民世論研究センター(NORC: National Opinion Research Center)と連携して調査は行われた。サンプルは4369人のアメリカ人であり、年齢は18歳から59歳であった。回答者は、全体の79%であり3432人であった⁸⁾。

同調査ではさまざまな性についての事柄が明らかになった。その一つとして、自分の性行動はすべて信仰に導かれたものであると考えている「伝統型」、セックスは恋愛関係には欠かせないが、結婚生活にはかならずしも必要ではないという「関係型」、セックスに愛が必要であるとは限らないという「娯楽型」という、性意識の多様性が浮き彫りとなった。その結果として、Michael らは意識と性行動のあいだに強固な繋がりがあること(Michael, R. et al. 1994=1996: 280)を指摘した。

もう一つの注目すべき大規模調査は、2009年の「国民性健康性行動調査」(NSSHB: The National Survey of Sexual Health and Behavior) (Herbenick et al. 2010)というインターネットを用いた調査である。これは Michael Reece らによって実施された。目的は、14歳

LGBT についてどのような質問がなされてきたのか

から 94 歳の全国の男女の確率サンプルにおける単独での性行動とパートナーとの性行動を調査することであり、その結果として、広範な性のライフコースについてのアメリカ人の性行動の包括的なスナップショットを提供することであった (Herbenick et al. 2010)。

結果として、アメリカの男女は、生涯を通じて多様な性行動を行っていることが明らかになった。調査の結果なかでも、同性同士の性行動 (Herbenick et al. 2010: 258-259) について注目すると、Herbenick らは、男性同士の性行為と女性同士の性行為は、比較的少数なものであったと述べている⁹⁾。

	調査	調査期間	人数	年齢	調査方法
アメリカ	キンゼイリポーツ (Kinsey et al. 1948=1950) (Kinsey et al. 1953=1955)	1938 年～1947 年	5300 人の白人男性 5940 人の白人女性		面接法
	国民健康社会生活調査 NHLSL (Laumann et al. 1994)	1992 年 2 月～9 月	対象：4369 人 回収率 79% 最終回答者数：3432 人	18～ 59 歳	質問紙調査 面接法
	国民性健康性行動調査 NSSHB (Reece et al. 2010) (Herbenick et al. 2010)	2009 年 3 月～5 月	最終回答者数：5865 人	14～ 94 歳	インターネット 調査
日本	第 7 回「青少年の性行動 全国調査」より (日本性教育協会 2013)	2011 年 10 月～ 2012 年 2 月	層化三段法 中学生 2504 名 高校生 2578 名 大学生 2600 名 から調査票を回収。 最終的な分析数は、 中学生 2504 名 高校生 2578 名 大学生 2558 名	中学生 高校生 大学生	自記式集合調査
	第 7 回「男女の生活と意 識に関する調査」より (日本家族計画協会 2015)	2014 年 9 月 11 日 ～10 月 13 日	層化二段無作為抽出 法 対象：3000 人 調査票を手渡すこと ができなかったもの を除く 2676 人のうち 有効回答者数 1134 人 回収率：42.4%	16～ 49 歳	質問紙調査 調査員による訪 問留置回収 (一部、対象者 からの郵送返送 も含む)

表 1 性の調査の概要

2-2 日本におけるセックスサーベイ

日本の調査 (表 1) では、1970 年代から現在まで「青少年の性行動全国調査」が継続し

て実施されている。この調査の目的は、日本の青少年（中学生、高校生、大学生）の性についてのさまざまな意見や態度、経験を明らかにし、社会的背景等との関連を検討することにある。同調査は、大阪市立大学の朝山新一らによって1974年から実施されるようになった。この調査は、1971年の総理府¹⁰⁾の「青少年の性意識調査」をきっかけとして始まっている。以上の調査が、日本性教育協会に委託され第1回調査（1974年）が行われた（日本性教育協会 1983: 8）。その後、1981年、1987年、1993年、1999年、2005年、2011年と、ほぼ6年間隔で続けられてきた。第1回（1974年）と第2回（1981年）の対象者は、高校生と短大生と大学生であるが、第3回（1987年）から中学生も対象者となった。結果については、『青少年の性行動』や『若者の性』白書』等にまとめられている。

同調査において、特に1974年から2011年の「性交経験」に注目すると、1974年では大学生男子（23.1%）、大学生女子（11.0%）、高校生男子（10.2%）、高校生女子（5.5%）において性交経験率は5%から20%程度であり、その後それぞれ上昇したものの、最新の調査結果では減少に転じている。大学生男子では、1999年（62.5%）と2005年（63.0%）で60%程度まで伸びるも、2011年（53.7%）に減少した。大学生女子では、2005年（62.2%）に同じく60%程度まで上昇するも、2011年（46.0%）に減少した。高校生男子では、1999年（26.5%）と2005年（26.6%）に26%程度まで上昇するが、2011年（14.6%）に減少する。高校生女子では、2005年（30.3%）に30%程度まで伸び、2011年（22.5%）に減少する。一方中学生では、中学生調査が始まった1987年より2011年まで男女ともども1.8%から4.7%の間で大きな変化は見られなかった¹¹⁾。

もう一つの日本の調査である日本家族計画協会の「男女の生活と意識に関する調査」は2002年から現在まで継続して実施されている。この調査の目的は、現在の日本における、性や妊娠、避妊、中絶や少子化等に関する男女の意識と行動がいかなるものかをさまざまな側面から分析することである（日本家族計画協会 2015: 3）。2002年に開始されてから2004年、2006年、2008年、2010年、2012年、2014年と7回にわたって実施されている¹²⁾。この調査では、1952年から2000年まで「毎日新聞社人口問題調査会」が2年おき25回にわたって実施してきた「全国家族計画世論調査」が参考にされている（日本家族計画協会 2003: 6）。

第7回調査の性行動の結果に注目すると、異性とのセックス経験が明らかになっている。これまでにおける異性とのセックス経験では、経験有は81.7%で、経験無は16.7%であった。また、この1年間にセックスをした相手の人数では1人（57.6%）が一番多く、続いてセックスをしなかった（22.0%）が多かった。次に、セックス経験有のうち、セックスをする関係のある相手では、配偶者（59.2%）が一番多く、その次にそのような相手がいない（20.1%）、決まった交際相手（14.2%）と続く。また1ヶ月間のセックス回数では、この1ヶ月間はセックスしなかったが一番多く（49.3%）、ついで1回は15.5%であった。

2-3 大規模セックスサーベイの課題

ここでは、アメリカにおけるセックスサーベイと日本におけるセックスサーベイを通じて浮上した課題を示す。

Ericksen と Steffen は、20 世紀に行われたセックスサーベイの歴史の検討から欧米で実施されてきた調査について検討をしている。彼らは、5 つのジャーナル¹³⁾のなかから性行動 (sexual behavior) に関する質問を含む 750 のサーベイを収集分析している (Ericksen and Steffen 1999: viii)。サーベイが行われた背景や結果だけでなく質問項目についても分析を行っている。そのなかには「*Gay Men and AIDS*」(Ericksen and Steffen 1999: 158-175) という章があり、20 世紀におけるゲイやレズビアン¹⁴⁾のサーベイの歴史、特に HIV/AIDS が流行した 1980 年代前後の調査に焦点をあてている。HIV/AIDS の流行により、医学の研究者たちが病気の特質を特定することに取り組むなか、社会学者たちはサーベイを用いて病気の伝染を理解することを始めた (Ericksen and Steffen 1999: 158)。ゲイ男性の性行為やライフスタイルの詳細についてのサーベイや性感染症に重点が置かれたサーベイ等が実施された (Ericksen and Steffen 1999: 159)。それらの調査の結果から、決まっていなかったパートナーとの性行為、特にアナルセックスにおける受け身のセックスが HIV/AIDS と関連づけられていく。それによってゲイの性行為がネガティブな評価をされるようになっていったということを Ericksen と Steffen は議論している。

また Irvine (2003) は、社会学における 1910 年 (初期シカゴ学派) から 1978 年 (Michel Foucault の『*History of Sexuality*』の英訳版の出版年) までの社会理論とセクシュアリティリサーチについてのレビューを行っている (Irvine 2003: 430)。

そして 2013 年には、セクシュアリティの人口統計学を扱う『*International Handbook on the Demography of Sexuality*』(Baumle, A. K. ed. 2013)、2015 年にはセクシュアリティの社会学を扱う『*Handbook of the Sociology of Sexualities*』(DeLamater, J. and Plante, R. F. eds. 2015) が出版されている。前者では、例えばセクシュアルマイノリティのデータを収集分析する際の推奨される質問項目のまとめの論文がある (Durso and Gates 2013)。このように、欧米においては、セックスサーベイにおけるゲイやレズビアンとの関連での議論、社会学とセクシュアリティに関する調査の議論、そして人口統計学とセクシュアリティの議論などが今までになされている。

一方、日本においてはどのような議論や検討がなされてきたのだろうか。例えば、量的調査において「性的指向」と「性自認」をどのように捉えるのかについては、性的指向と性自認を含めた人口学的研究の研究動向の検討を行った釜野 (2016b) がある。釜野 (2016b) は、「アメリカでは 1990 年代から代表性のある量的調査を通じて、性的指向を捉える試みが蓄積されており、性的指向・性自認を社会調査等でどのように捉えるのかの方法論も充実してきている」とする一方で「日本に目を向けると、公的統計や社会調査によって性的指向や性自認を捉える試みは数少なく、現状ではウェブ調査によって得た数字が日本の LGBT 人口割合として、一人歩きしている状況である」と指摘している。釜野他 (2016a) は、2015

年に「性的マイノリティについての意識 2015 年全国調査」を実施したが、実際彼らは、この調査設計と調査結果をもとに、「性的指向」と「性自認」の質問項目についての検討を行っている（釜野 2016a: 203-208）。

2015 年に実施された釜野他の調査は、「現在の日本社会において性的マイノリティがどのように捉えられているのかを把握することを目指して企画されたもの」（釜野 2016a: 11）であり、性の調査であるセックスサーベイではない。このことから、日本における大規模なセックスサーベイについても、LGBT や性的マイノリティの人々がどのように捉えられているのかという視点で検討する必要があるだろう。

2-4 本稿の意義

本稿では、現在までに行われてきた性についての大規模質問紙調査の質問項目に注目し、そのなかでも性的マイノリティや LGBT に関する質問を取り上げる。質問項目や聞かれ方は、質問紙調査が行われたその時代や、その土地の、性的マイノリティの性行為や性的な役割に対する意識をある種象徴するようなものと考えられる。そのため、質問項目を見ていくことで、性行為をめぐる調査自体そのものを捉えなおすことができるものとする。

3 方法と対象

本稿では、質問文に性的マイノリティや LGBT に関連することばがあったものを分析の対象とした。そのことばとは「性的マイノリティ」、「レズビアン」、「ゲイ」、「バイセクシュアル」、「トランスジェンダー」、「性的指向」、「同性」、「両性」、「同性愛」、「両性愛」、「性同一性障害」、「男性」、「女性」等である。対象とした調査は、アメリカの 1992 年の「国民健康社会生活調査」（NHSLs）、日本の調査では 1970 年代から現在まで続いている「青少年の性行動全国調査」と 2000 年代から現在まで続いている「男女の生活と意識に関する調査」だ。「国民健康社会生活調査」では、附録 C（Laumann et al. 1994: 606-677）にある質問紙を、「青少年の性行動全国調査」については第 1 回から第 7 回までの質問紙を、「男女の生活と意識に関する調査」については第 1 回から第 7 回までの質問紙の内容を検討した。2016 年の 10 月から 11 月にかけて実施された第 8 回「男女の生活と意識に関する調査」については、今回分析の対象としていない。

「国民健康社会生活調査」では、質問文の日本語訳は基本的に『セックス・イン・アメリカ——はじめての実態調査』（Michael, R. et al. 1994=1996: 339-386）に基づいている。しかし同書の質問紙は簡約化されたものであるため、同書に掲載されてない質問文もある。その質問文については、本来の質問紙の全文が掲載された『セクシュアリティの社会組織——アメリカにおける性実践』（Laumann et al. 1994: 606-677）から筆者が日本語訳をしている。

2-1 で取り上げた、2009 年の「国民性健康性行動調査」（NSSHB）については、今回質問紙を入手することができなかつたため分析の対象としていない。今後の課題としたい。同調査の結果は、2010 年 10 月に出版された『*The Journal of Sexual Medicine*』の特集号（p.

243～p.373) に9本の研究論文と解説とでまとめられているが、それぞれの論文にはおおまかな項目の紹介はあるものの、実際の質問文や質問紙はなかった。

キンゼイリポーツについては、今回分析の対象としていない。その理由として、調査データが、個人的な面接 (personal interviews) により集められたもの (Kinsey et al. 1948=1950: 114) であるため、調査手法が質問紙調査ではないことが挙げられる。『*Sexual Behavior in the Human Male*』 (Kinsey et al. 1948: 63-70=1950: 115-154) に、質問項目のリストは掲載されている¹⁴⁾。しかし、面接のデータの標準化のために彼らがそれぞれの項目に対して与えた厳密な定義については、「定義の全貌はあまりに大き過ぎて、残念ながらこの書物には載せきれていない」 (Kinsey et al. 1948=1950: 154) とある。以上のことから、キンゼイリポーツについては今回対象としなかった。

4 LGBT の性に関する質問の特徴

Durso と Gates (2013) は、「ベストプラクティス——セクシュアルマイノリティのデータの収集と分析する」において、セクシュアルマイノリティのデータを収集分析する際に推奨される質問文を提示している。Durso と Gates は、「性的指向」 (*sexual orientation*) は、「性的魅力」 (*sexual attraction*)、 「性行動」 (*sexual behavior*)、 「自己の同定」 (*self-identification*) という3つの主要な側面があると指摘している¹⁵⁾ (Durso and Gates 2013: 23-24)。その3つの側面を聞くための質問文が示されている。そして、トランスジェンダーの人々を同定するアプローチ、「配偶関係、パートナーシップ関係、同棲関係」についても推奨される質問として紹介している (Durso and Gates 2013)。

本稿では、Durso と Gates (2013) から、「性的魅力」、「性行動」、「配偶関係、パートナーシップ関係、同棲関係」の3つの分類を倣いたい。また Durso と Gates の「自己の同定」については、「人が自身の性的指向をどのように同定するか」という定義のため、本稿では「人が自身の性的指向をどのように同定するか」という「性的指向」¹⁶⁾と「人がどのように性自認を同定するか」という「性自認」¹⁷⁾の2つの分類とした。さらに、Durso と Gates に対する批判として、新たに「性についてどう考えるか、性について知りたいこと」、「性的ないたずら」、「挿入する側、挿入される側」という分類が必要であろう。以下では、この8つの代表的な類型「性的魅力」、「性的指向」、「性自認」、「性行動」、「性についてどう考えるか、性について知りたいこと」、「配偶関係、パートナーシップ関係、同棲関係」、「性的ないたずら」、「挿入する側、挿入される側」に沿って分析を行った。

4-1 性的魅力

まずは、同性または両性に性的に惹かれるという「性的魅力」という類型である (表2)。日本の「青少年の性行動調査」において、「今までに同性の人に性的魅力を感じたことがあるか」という質問は、第1回 (1974年) から第4回 (1993年) まで続いていた。4-4 で取り上げる「同性の人と性的な身体接触をしたことがあるか」も同様であるが、性的魅力と身

	内容／特徴	研究
性的魅力	・性的に惹かれる性別 (女性だけ, ほとんどが女性, 女性と男性の両方, ほとんどが男性, 男性だけ)	(Laumann et al. 1994: 658)
	・同性とセックスすることの魅力度 (とても魅力的, 多少は魅力的, 魅力的でない, まったく魅力的でない)	(Laumann et al. 1994: 648)
	・同性の人に性的魅力を感じた経験の有無	(日本性教育協会 1975: 74) 他
性的指向	・ご自分の考えでは, あなたは… (ヘテロセクシュアル, ホモセクシュアル, バイセクシュアル, その他 (具体的に), ノーマル/ストレート, わからない)	(Laumann et al. 1994: 658)
性自認	・男であること, 女であることに気づいた年齢 (5歳まで, 小学校の時, 中学校の時, 中学校を卒業してから, 18歳以上になってから, わずれた, わからない)	(総理府青少年対策本部 1972: 291)
性行動	<ul style="list-style-type: none"> ・思春期以降の同性との性経験の有無とその年齢 ・同性との性体験は (自ら望んでしたこと, 成り行きでなったことととくに望んでいたわけではない, 意思に反して強要されたこと) ・その人物はあなたにとってどんな存在か (恋人, 親しい人だったが恋人ではなかった, あまり親しくない人, 知り合ったばかりの人, セックスと引き換えにお金を払った相手, セックスと引き換えにお金をもらった相手, 見知らぬ人, 親族, その他 (具体的に)) ・同性との性経験をした主な理由 (パートナーへの愛情, 周囲の圧力, セックスに対する好奇心/積極性, 肉体的快樂, 薬物やアルコールのせい, その他 (具体的に), わからない/おぼえていない) ・性経験をした相手の年齢 (年上, 年下, 同い年) ・性経験のなかの具体的な性行為 ・その相手とのセックスの回数 (2度としなかった, 1度だけ, 2回から10回以上, いまも関係が続いている) ・最初の体験以外の同性からの性的な強要について ・18歳なるまえの同性との性体験 	(Laumann et al. 1994: 656)
	<ul style="list-style-type: none"> ・同性の人との性的な身体接触の経験の有無 ・初めて経験したときの年齢 ・相手の年齢 (年上, 年下, 同い年) ・相手の職業 (生徒・学生, サラリーマン (サラリーガール, その他, わからない) ・現在も同性の人との性的な身体接触をしているか 	(日本性教育協会 1975: 74) 他

LGBT についてどのような質問がなされてきたのか

<p>性行動</p>	<p>【女性のみ】思春期以降の女性との性的な行為 (オーラルセックスをする／される, 金銭を受ける／金銭を渡す, 無理やりする／される) 【男性のみ】思春期以降の男性との性的な行為 (オーラルセックスをする／される, アナルセックスをする／される, 金銭を受ける／金銭を渡す, 無理やりする／される)</p>	<p>女性のみ (Laumann et al. 1994: 674) SAQ4F 問 8 ~ 問 14 男性のみ (Laumann et al. 1994: 676) SAQ4M 問 8 ~ 問 16</p>
<p>性について知りたいこと</p>	<p>・大人が同性と肉体関係を持つことについてどう考えるか (どんな場合でもよくない, たいていの場合はよくない, よくない場合もたまにある, 全然かまわない)</p>	<p>(Laumann et al. 1994: 666)</p>
	<p>・同性と性的行為をすること (かまわない, どちらかといえばかまわない, どちらかといえばよくない, よくない, わからない)</p>	<p>(日本性教育協会 2001: 171)他</p>
	<p>・いま性について知りたいことはなにか (性的マイノリティ (同性愛者, 性同一性障害など))</p>	<p>(日本性教育協会 2013: 214)</p>
	<p>・性に関する事柄について一般的に何歳くらいの時に知るべきだと思いますか (多様な性のあり方 (同性愛, 性的指向, 性同一性障害等))</p>	<p>(日本家族計画協会 2015: 168)他</p>
<p>配偶関係, パートナー, 同棲関係</p>	<p>・配偶者／同性相手の性別 (男性, 女性)</p>	<p>(Laumann et al. 1994: 616)</p>
	<p>・過去 12 か月, 過去 5 年間のセックスパートナーの性別 (男性だけ, 男性と女性の両方, 女性だけ) ・18 歳の誕生日以降セックスをした女性のパートナーの数, 男性のパートナーの数</p>	<p>(Laumann et al. 1994: 671-672) SAQ2</p>
	<p>・パートナーの他のセックスパートナーの有無とその性別 (男性, 女性, 両方, わからない)</p>	<p>(Laumann et al. 1994: 627)他</p>
<p>性的ないたずら</p>	<p>・性的ないたずらをした人物の男女別人数</p>	<p>(Laumann et al. 1994: 651)</p>
	<p>・性的ないたずらをされたことの経験の有無 ・いたずらの内容 ・いたずらをした人の性別 (同性から, 異性から) ・いたずらをした人は知人か見知らぬ人か ・いたずらをした人の職業 (生徒・学生, サラリーマン (サラリーガール, その他, わからない)</p>	<p>(日本性教育協会編 1975: 68)</p>
<p>挿入される側</p>	<p>【すべてのカップル】 ・パートナーにオーラルセックスをされた頻度, オーラルセックスをした頻度 (かならず, たいてい, ときどき, たまに, 一度もない) 【男性と女性のカップル/男性と男性のカップルのみ】 ・パートナーとのセックスにおけるアナルセックスの頻度 (かならず, たいてい, ときどき, たまに, 一度もない) ・セックスにおけるコンドームの使用頻度 (かならず, たいてい, ときどき, たまに, 一度もない) 【男性と男性のカップルのみ】 ・アナルセックス時 (かならず挿入する側になる, かならず挿入される側になる, 両方)</p>	<p>(Laumann et al. 1994: 626)他</p>

表 2 性の調査における LGBT に関する質問

体接触の問いはセットで聞かれていた質問である。しかしその後、第5回調査(1999年)からは、回答者自身の直接的な経験については聞かれなくなった。4-5で後述するが、第5回からは「同性と性的行為をすること」についてどう思うかという質問が登場する。

アメリカの「国民健康社会生活調査」(NHLS)において、「性的魅力」についての質問は2つあった。1つは「普段、あなたが性的に惹かれるのは……」という質問だ。これは「小児期、青年期、性的ないたずらの被害」というセクション¹⁹⁾にあり、49問あるセクションの中の47問目と48問目として位置している。回答者が女性の場合は「男性だけ」、「ほとんどが男性」、「女性と男性の両方」、「ほとんどが女性」、「女性だけ」から選択する。回答者が男性の場合は、選択肢が「女性だけ」から始まり順番が逆になっている。つまり、女性の場合は「男性だけ」から始まり、男性の場合は「女性だけ」から始まるのだ。確かに、回答者の数では女性の回答者が「男性だけ」を選択すること、男性の回答者が「女性だけ」を選択することが多いのかもしれない。しかしながら、性的に惹かれるということについて、男性と女性といういわゆる異性愛的な組み合わせが選択肢のはじめに来ており、この質問において異性愛が第一の選択肢となっている点は注目に値する。

この順番について Durso と Gates (2013) は以下のことを指摘している。「過去に、あなたは誰とセックスをしましたか。(a) 男性のみ (b) 女性のみ (c) 男性と女性の両方 (d) 私はセックスをしなかった¹⁸⁾」という質問において、可能であれば回答者の性別 (sex) によって回答者の性別とは異なる性別を最初に置くことを推奨している。その理由として、回答者は最初の答えがデフォルトであると見る傾向があるということだ。つねに男性を最初にリストすることは男性の回答者の間でいくらかの誤検出 (false positives) を生じさせるかもしれない。同じく、つねに女性が最初にあることは、女性の間で誤検出を生むかもしれない (Durso and Gates 2013: 25) と解説する。つまり、「誰とセックスしたか」という質問において、選択肢の最初に「男性のみ」がある場合、例えば「女性のみ」を選択しようとした男性の回答者において誤って「男性のみ」を選択する可能性があるということであり、選択肢の最初に「女性のみ」がある場合は、これとは逆のことが起きることを懸念している。Durso と Gates はセクシュアルマイノリティのデータを収集するための方法を提示しているが、むしろ誤検出を生じさせないために「デフォルト」として見られがちな異性愛的な組み合わせに依拠することで誤検出を防止することを推奨していると言える。

アメリカの「国民健康社会生活調査」(NHLS)における2つめの質問は、「同性とセックスをする」ことについての魅力度を答える質問だ。魅力度は「とても魅力的」、「多少は魅力的」、「魅力的でない」、「まったく魅力的でない」から選択する。この質問は、性的な空想 (fantasy) についてのセクションにあって、「一度に複数の人とセックスをする」、「相手が望んでいない行為を強要する」、「望んでいない行為を強要される」、「他人の性行為を見る」や「よく知らない人とセックスをする」等の性についての事柄の魅力度を答える項目のなかの一つとして登場している。

質問紙のなかの性的な空想 (fantasy) についてのセクションに「同性とセックスするこ

と」が位置づけられていることについての意味を考えたい。このセクションの冒頭には「セックスに対する考え方や、どんな行為に強い魅力を感じるかは、人それぞれです。ここでは、セックスに対する人々の考え方をよく理解するために、セックスについてあなたが感じていることに関して、いくつかお尋ねいたします。」(Laumann et al. 1994: 647) とある。例えば、このセクションの魅力度を答える質問のなかに「同性とセックスすること」に対して「異性とセックスすること」はない。「異性とセックスすること」をファンタジーとして捉えて魅力的だと感じることも可能だろう。しかし、先述したようなある意味、タブーであるような行為のなかに「同性とセックスすること」が並んでいる。このことによって、「同性とセックスすること」もまたタブーであるように回答者に見えてしまうのではないか。

4-2 性的指向

次は、「性的指向」という類型である(表2)。アメリカの「国民健康社会生活調査」(NHSL)において、4-1で取り上げた「普段、あなたが性的に惹かれるのは……」という質問の直後に来る質問で、自分のセクシュアリティはどのようなものかという「ご自分の考えでは、あなたは… (Do you think of yourself as…)」という質問がある。「小児期、青年期、性的ないたずらの被害」というセクション8の最後に位置する問49である。この質問で回答者は「ヘテロセクシュアル」(異性愛)、「ホモセクシュアル」(同性愛)、「バイセクシュアル」(両性愛)、「その他」, 「ノーマル/ストレート²⁰⁾」, 「わからない」から選択する。

ここで注目したいのは、例えば「トランスジェンダー」やその他のアイデンティティについての選択肢はないことだ。推察できることとして、この調査を実施したLaumannらがこの質問を「同性愛の経験や感情」(homosexual experience and feelings)に関連する質問のひとつとして設定した(Laumann et al. 1994: 292-297)ということがあるだろう。つまり、この質問は基本的に、性的な興味、関心、欲望の対象が異性、同性、あるいは両性のいずれに向いているかという指向性(伊藤 2013: 94)である「性的指向」について聞いていると考えられる。

もちろん、そもその前提として以上の質問が性的指向についての質問文であるからこそ「トランスジェンダー」等が含まれていないのではないかという批判も考えられる。このことについて、DursoとGates(2013)はこれまでの調査事例をまとめることによって以下のような指摘をしている。彼らはトランスジェンダーの回答者からも性的指向のデータを収集することが必要であると述べる(Durso and Gates 2013: 27-28)。DursoとGatesはScout²¹⁾によって開発された尺度を参照している。この尺度は、性的指向とトランスジェンダーのステータス(status)を同時に捉えることができるという。その尺度とは、「あなたは、あなた自身を次の一つまたはそれ以上の…ストレート、ゲイもしくはレズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダーとして考えますか」というものであり、もし参加者が回答を選択することに抵抗を感じる場合、インタビュアーは「もしそれがあなたにより適して

いるのであれば、あなたは異なるカテゴリーの名前を挙げることができます」と伝える。Scoutの尺度を用いることで、例えば「ストレート」と「トランスジェンダー」の2つを選択した場合、「性的な興味、関心、欲望の対象」は異性であるが、自身が考える性別としては例えば「出生時に届けられた性別」とは異なる性別であるということ捉えることも可能となる。

また、質問紙調査においてトランスジェンダーの人々を捉えるためには、さまざまなアプローチがあるという。DursoとGates(2013)は、「トランスジェンダーを同定するための多様なアプローチ」の一つとして、「2ステップアプローチ」を紹介する。このアプローチでは、回答者に彼らのセックス(sex)と彼らのジェンダー(gender)を報告することを求める。セックスでは、例えば「男性」、「女性」、「インターセックス」を、ジェンダーでは「男性」、「女性」、「トランスジェンダー」が選択肢となる。2つ目の手法は「あなたはトランスジェンダーですか」と直接参加者に聞く手法だ。3つ目は、「ジェンダー表現両極尺度(bipolar gender expression scale)」であり、自身を「とても男らしい(very masculine)」と「とても女らしい(very feminine)」から選択する。

日本の調査では、2016年に実施された東京都世田谷区の「性的マイノリティ支援のための暮らしと意識に関する実態調査」において「出生時に届けられた性別(男性、女性、その他)」、「現在の戸籍上の性別(男性、女性)」、「現在自認している性別(男性、女性、どちらともいえない、その他)」という3つのアプローチで聞かれた²²⁾。これは、DursoとGatesが推奨する「2ステップアプローチ」ならぬ「3ステップアプローチ」と言える。セックスに関する調査においても、以上に示したような性別についての複数の質問を加えることで、トランスジェンダーの人々に対しても性意識や性行動を聞くことができるのではないかと²³⁾。

4-3 性自認

次は、「性自認」という類型である(表2)。「青少年の性行動全国調査」の前身となった日本の総理府による1971年「青少年の性意識調査」の「男であること、女であることに気づいた年齢」という質問(表2)は、自分が男であるか女であるかまたはその他さまざまな性として自分で認めるかという性自認を問う質問の一種として考えられる。「あなたが最初に男の子であること(または女の子であること)を何歳ぐらいのときに気がつきましたか」という質問²⁴⁾の回答の選択肢は「5歳までに」、「小学校のとき」、「中学校のとき」、「中学校を卒業してから」、「18歳以上になってから」、「わすれた」、「わからない」となっていた。この質問は、総理府の調査にのみに登場し、その後の1974年からの「青少年の性行動全国調査」には引き継がれることはなかった。

この質問は「性の自覚意識」という項目として設定されており「性教育の開始時期を判定するための一つの素材とするため、青少年が性差の自意識を最初にもった時期についての質問を設定した」とある(総理府青少年対策本部1972:3-4)。以下は、具体的な調査の意図である。

性教育の開始時期は、性の自覚意識に相応する必要があるだろう。子どもが、生まれてはじめて「性」についてもった疑問に、親が正しく教える態度が望ましい。そうでないと、性のタブーとする考えが自然と起こり、のちにいたって性を不自然に考え、正しい知識をもととせず、いたずらに「のぞきみ」的な考えをもったり、不幸な結果にいたるおそれがある。では、この性の自覚意識は、「いつ」表れるのであろうか（総理府青少年対策本部 1972: 7）。

調査の意図からすると、必ずしも性的マイノリティに関連する質問として聞かれたものではないだろう。しかし、質問自体は、性自認についての質問として答える可能性も考えられる²⁵⁾。

4-4 性行動

次は、同性との性経験の「性行動」という類型である（表2）。日本の「青少年の性行動調査」では、「同性の人と性的な身体接触をしたことがあるか」という質問があり、第1回の調査（1974年）から第4回の調査（1993年）まで続いていた。性的な身体接触がある場合、回答者が初めて経験した年齢、相手の年齢、相手の職業と、現在も同性の人と性的な身体接触をしているかということが問われる。第3回調査（1987年）からは、性的な身体接触をした同性の相手の年齢と職業を聞く項目は削除されるという変化が一部あった。

アメリカの「国民健康社会生活調査」では、思春期以降（12歳、13歳以降）の「同性との性経験」についての質問がある。これは「小児期、青年期、性的ないたずらの被害」というセクション8にある。回答者は、まずは同性と初めてセックスをした年齢が聞かれる。その同性との初めての性経験において、「自ら望んでしたこと」、もしくは「成り行きでなったことで、とくに望んでいたわけではない」こと、「意思に反して強要されたこと」のなかから答える。そして、性経験の相手との関係、性経験をした相手の年齢、性経験をした理由についても回答することになる。もし「意思に反して強要されたこと」を選択した場合は、どのように強要されたかについても答えることとなる。調査の面接員たちはトレーニングを受けているというものの（Laumann et al. 1994: 62-63）、カウンセリングについての訓練を受けたか、経験豊富なカウンセラーが同行したのかは不明である。もし強要された性経験について聞く場合、例えばレイプ等に詳しいカウンセラーの同行がなければ、現在においては調査倫理の観点から実施自体が難しいのではないかと考えられる。

さらに質問は続き、思春期以降の同性との初めての性経験における具体的なセックスの内容やその相手とのセックスの回数が聞かれる。男性と男性の行為の場合では、「手で性器を刺激される」、「手で性器を刺激する」、「オーラルセックスをされる」、「オーラルセックスをする」、「アナルセックスをする」、「アナルセックスをされる」、「その他」のなかからおこなわれた行為すべてを選択することになる。女性と女性の行為の場合では、アナルセックスの選択肢はなく、「性器を身体にこすりつける」、「身体に性器をこすりつけられる」という選

択肢があるがそれ以外については男性の場合と同様だ。具体的な性行為は、質問紙とは別にある小さなカードである「ハンドカード」に書いてある。質問紙には番号のみ書かれており、ハンドカードに書いてある上記の具体的な性行為を見ながら、面接員には選択肢にふられた番号だけを答えるようになっている。このことで、面接調査でも、答えにくい質問をできるだけ回答者が答えやすいような工夫がなされていた。

4-5 性についてどう考えるか、性について知りたいこと

「性についてどう考えるか、性について知りたいこと」という類型では、数ある性的関係に関する項目の1つとしてLGBTに関する質問が登場している(表2)。

アメリカの「国民健康社会生活調査」では、「大人が同性と肉体関係を持つことについては、どうお考えでしょう」という質問がある。これにたいして「どんな場合でもよくない」、「たいていの場合はよくない」、「よくない場合もたまにある」、「全然かまわない」から選択する。これは、質問紙のなかの「態度」というセクション10にあり、例えば「結婚まえの男女が肉体関係を持つこと」や「婚外交渉」をどのように考えるかという質問のなかの1つの項目である。また、選択肢の順序において最初に「どんな場合でもよくない」がある。婚前交渉や婚外交渉のようなタブーを想起させる質問の並びのなかで、同性との肉体関係について聞かれること、また選択肢の順序については、留意が必要であろう。

日本の「青少年の性行動全国調査」では、第5回調査(1999年)より、「あなたは(1)から(4)のような性的な行為についてどう思いますか」のなかの1つの性的行為として「同性と性的行為をすること」が登場した。この項目にたいして「かまわない」、「どちらかといえばかまわない」、「どちらかといえばよくない」、「よくない」、「わからない」から答える。この質問は、第6回調査(2005年)でも登場する。ただし、この質問は、中学生は対象外の質問となった。中学生が対象者となった第3回調査(1987年)以降、高校生や大学生と答える質問は同じものであったが、第6回では全体としても中学生と高校生以上の二種類の調査票となった。高校生以上の調査票と比べると中学生の調査票では、いくつかの項目が含まれていない²⁶⁾(日本性教育協会 2007: 10-11)。その理由として「生活や知識の現状を考慮して、中学生の調査票には含めなかった」(日本性教育協会 2007: 10)とある。また、中学生調査では質問文のなかの「セックス(性交)」ということばが「性的な接触」となっている(日本性教育協会 2007: 176-195)。引き続き第7回でも、質問紙全体として中学生と高校生以上での質問項目の違いがあるものの、この「同性と性的行為をすること」についてどう考えるかという質問は中学生にたいしても聞かれる質問として再び登場した。

また、同調査の第7回(2011年)では、「性について知りたいこと」という質問のなかの一つの項目として「性的マイノリティ(同性愛者、性同一性障害など)」が登場する。「性について知りたいこと」という質問自体は、第1回調査(1974年)からあるが、性的マイノリティやLGBTに関連する項目が出てきたのは第7回が初めてである。

日本の「男女の生活と意識に関する調査」では、「性に関する事柄について、あなたは—

般的に、何歳くらいの時に知るべきだと思いますか」という質問のなかの一つとして「多様な性のあり方（同性愛、性的指向、性同一性障害等）」がある。これは、第1回（2002年）から最新の第7回（2014年）まで続いている。その選択肢は、年齢の他に「個人によって異なる」と「知る必要はない」がある。この調査において、性的マイノリティやLGBTに関連する質問はこの質問のみである。このように性的マイノリティやLGBTに関連する質問が限定的であることの理由として推察できることは、この調査が「望まない妊娠の防止」（日本家族計画協会 2003: 6）が目的の一つとしてあるということだ。そのため、基本的に陰性交が想定されている。この場合、陰性交とは男性のペニスを女性の膣に挿入することを指し、異性愛が前提となっている。

このことは、以下の質問の変遷からも伺うことができる。第1回（2002年）から第3回（2006年）まで「あなたが、最初にセックス（性交渉）をしたのは何歳の時ですか」や「初めてのセックス（性交渉）の時に、避妊をしましたか」（日本家族計画協会 2003: 97-98）という質問は、第4回（2008年）から「あなたが、最初に異性とセックス（性交渉）をしたのは何歳の時ですか」や「異性と初めてセックス（性交渉）の時に、避妊をしましたか」（日本家族計画協会 2008）という質問文となる。第4回から「異性とセックス」という文言が明示化された。第3回以前では、同性とのセックスを回答していた人も、おそらく含まれていた可能性がある。上記の問いで「避妊しなかった」を選択すると、避妊しなかった理由を答える。その中には「妊娠しなかった」という選択肢もある。同性とのセックスの場合では、例えば女性用や男性用のコンドームを使用しないと性感染症等の予防はできないものの、妊娠しないということは誤りではない。このことから、この調査では、異性とのセックスが特に注目されていると考えられる。

4-6 配偶関係、パートナーシップ関係、同棲関係

次は「配偶関係、パートナーシップ関係、同棲関係」という類型である（表2）。アメリカの「国民健康社会生活調査」の質問紙の特徴の1つとして「パートナーの名簿（partner roster）」や「配偶者／同棲相手の名簿」という表がある。これは、今までのパートナーのほぼ全員を記入していくリストである。この名簿にパートナーのファーストネーム等を書くことが求められる。しかし名前を書くことは、その後の補足質問等で面接員と回答者がどのパートナーについて話しているのかお互いにわかりやすくするためであり、本当の名前を記す必要はない（Laumann et al. 1994: 623）。その名簿のなかで、パートナーや配偶者／同棲相手の基本的な情報を答えるのだが、その情報の1つにパートナーの性別を男性と女性から選択する項目がある。

また、パートナーの性別については、最近の1年間、最近の5年間、18歳以降という3つの期間で、パートナーの性別について「男性だけ」、「男性と女性の両方」、「女性だけ」から選択する質問がある。また、変わった質問としては、回答者にたいして自分のパートナーに他のセックスパートナーがいたかを聞く質問だ。以上のように、配偶者や同棲相手、その

他のパートナー等、生涯のセックスパートナーの性別を答えていくのだが、そのなかで選択できる性別は、男性もしくは女性である。男女以外のその他の性については、基本的にはない。

また「配偶者／同棲相手の名簿」では「配偶者／同棲相手の性別はどちらですか」という質問につづいて「同居をはじめたとき、あなたはその相手と結婚していましたか」という質問がある。そこでは「男性と男性のカップルまたは女性と女性のカップルであった場合は、問12に進んでください」という指示がある。以下の「その相手と結婚したことがありますか」、「その結婚は解消されましたか」、「その結婚はどのように解消されたのですか」等結婚についての質問は、男性と女性のカップルのみが答える。その後続く、同居中の質問はすべてのカップルが共通して答える。この調査が実施されたのは、1992年のことであり、その時点では、どの国でも同性婚を認めていなかったため、男性と男性、女性と女性の配偶者の質問は省かれたのだろう。同性の結婚が、世界ではじめて法制化されたのは2001年のオランダのことであり、アメリカにおいてはマサチューセッツ州で最初に2004年に法制化され、そしてすべての州において同性の結婚が合憲となったのは2015年のことだ²⁷⁾。2009年に実施されたアメリカの「国民性健康性行動調査」(NSSHB)では、以上のことを鑑みている。アメリカの「国民健康社会生活調査」(NHSLs)が実施された1992年以降のアメリカにおける性行動に影響を与えるさまざまな変化のひとつとして、同性との関係(same-sex relationships)にたいする態度は同性結婚やシビルユニオンがいくつかの州において法制化されたことにより変化した(Herbenick et al. 2010: 256)と述べている²⁸⁾。

日本においても、東京都渋谷区で「渋谷区男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」(いわゆる同性パートナーシップ条例)が2015年の区議会で可決され、同性パートナーに対して証明書が2015年11月より交付されるようになった。同日、世田谷区においても「世田谷区パートナーシップの宣誓の取扱いに関する要綱」により「同性パートナーシップ宣誓」が交付されるようになった²⁹⁾。

4-7 性的ないたずら

次は「性的ないたずら」という類型である(表2)。日本の「青少年の性行動全国調査」の第1回調査(1974年)では「いままでに、性的ないたずらを、されたことがあるか」という質問がある。そのなかで「だれから、いたずらされたか」にたいして「同性から」と「異性から」を選択する。この質問は、第2回以降は登場していない。第4回(1993年)から最新の第7回(2011年)まで性的な被害についての項目はあるものの、同性か異性かという問いはない。

アメリカの「国民健康社会生活調査」では、「あなたに性的ないたずらをした人物について、お尋ねします」のなかで「その人々を男女別にすると、それぞれ何人になりますか」という質問があり、男性の人数と女性の人数をそれぞれ答える。

このような調査において、質問の是非あるいは、そのデータに対して様々な留保や躊躇が

生まれる。性的虐待の質問にたいして、回答者は答えるのだろうか。日本の調査について言えば、西澤（2010）は、欧米の先進各国の統計に比べて、全国児童相談所への虐待関係の通告件数の総数のうち性的虐待に関する通告が少ないことから、思春期年齢未満の幼い子どもの性的虐待が見落とされている可能性を指摘している（西澤 2010: 112-114）。そして、性的虐待の通告件数の相対的低さは、過少評価とそれともなう過少報告の結果であると示唆している（西澤 2010: 112-114）。西澤が指摘するように、性的ないたずらをされた経験はあまり報告されることはないのだろうか。性的被害経験の質問を行うことの是非については、日本の「青少年の性行動全国調査」の第6回においても議論がされている。

性的経験自体が中学生や高校生によっておおむね肯定的に受け止められていると、先に述べたけれども、逆に否定すべき経験であったりトラウマとなったりしていることも十分予測できる。そのような場合には、性的経験に関する質問をおこなうこと自体が、望ましくない影響を調査対象者にもたらす可能性がある。とりわけ、性的被害経験に関する質問などではその可能性が高い（日本性教育協会 2007: 18）

強要された性経験でも指摘した点（4-4）であるが、性的な被害を受けた経験を問うことは、重要ではあると同時に、回答者に負担をかけることになる点は注意が必要である³⁰⁾。

4-8 挿入する側、挿入される側

アメリカの「国民健康社会生活調査」において、「挿入する側、挿入される側」という質問項目は、「男性と女性のカップル」、「男性と男性のカップル」、「女性と女性のカップル」によって答える質問が変わってくる（表2）。すべてのカップルは共通して「オーラルセックス」³¹⁾をパートナーからされた頻度と、パートナーにした頻度を答える。男性と女性のカップルだけが答える質問では、「陰性交」（男性のペニスを女性の陰に挿入すること）についての質問がある。一方、男性と女性のカップルと、男性と男性のカップルだけ答えるものは「アナルセックス」（男性のペニスをパートナーの肛門に挿入すること）の質問だ。ここではアナルセックスの頻度と、アナルセックスにおけるコンドームの使用の頻度が聞かれる。そして男性と男性のカップルのみ、アナルセックスにおける「かならず挿入する側になる（Active exclusively）」、「かならず挿入される側になる（Passive exclusively）」と「両方（Both）」から選択する。

一方、女性のカップルについては、オーラルセックスのみで陰性交やアナルセックスについて答える質問はない。それに対して、男女のカップルについては、アナルセックスの役割以外は、オーラルセックス、陰性交、アナルセックスの3つの性行為について答えるのだ。例えば、アナルセックスにおいて生身のペニスだけでなく、器具や指等を用いればどのカップルにおいても可能である。もちろん、女性のカップルにおいても陰やアナルを用いたセックスの形はさまざまにあるだろう。

男性カップルにおける「挿入する側」, 「挿入される側」は, HIV/AIDS や性感染症との関連で論じられることが多い。例えば, 2009 年に実施された東京地域のクラブイベントの参加者に対する質問紙調査において, コンドームの使用頻度は, 特定のパートナーもしくはその場限りの相手とのアナルセックスにおいて, タチとしてアナルセックスを行った時と, ウケとして行った時とで聞かれる。この場合, タチはアナルセックスにおいて「挿入する側」, ウケはアナルセックスにおいて「挿入される側」である。この質問項目は, 日本の他の地域のゲイバーやクラブで実施されている質問紙調査でも継続的に聞かれている質問である³²⁾。アメリカの「国民健康社会生活調査」についても, 1980 年代に流行したエイズがこの調査の発端となっているため, この質問が HIV/AIDS や性感染症との関連が意識されているだろう。

また, 挿入する側, 挿入される側ということを, ゲイカップルやレズビアンカップル等のセクシュアルマイノリティのカップルにおける役割分担として考えた場合, 例えば森山 (2012) のゲイ男性のタチとネコについての研究がある。森山 (2012) は, ゲイ男性のタチ/ネコを考察する上で, レズビアンの「ブッチ」(Butch) と「フェム」(Femme) という役割に関する Case と Butler による議論を参照する。森山は, ゲイ男性における「性的差異」の形態もしくは「男役/女役」とも説明される, 「タチ/ネコという用語系」のしくみをゲイ男性 12 人に対するインタビューデータから示す。森山 (2012) は, 「肛門への挿入を伴う性行為において挿入する側の人がタチ, される側の人ネコ」という定義には収まらない「挿入を伴う性行為を行わない人にもタチ/ネコという分類が有効な場合」があり, タチ/ネコという「性的差異」は男/女の「性的差異」にすべてを「還元」できるものではないことを指摘している。

5 考察

大規模な性の調査において質問項目から調査者たちの考え方やその変化をすかし見ることができる。では, 3つの論点について考察したい。

5-1 異性愛が前提とされていること

第1の論点は, 質問のつくりとして異性愛的な考え方が前提にされている点である。アメリカの「国民健康社会生活調査」(NHSL)において, 性的に惹かれる性別を答える質問では, 回答者が男女の場合どちらにおいても, 最初の選択肢は, 反対の性であった(4-1)。このことから, 質問において異性愛の基準が用いられていることを示した。また日本の「男女の生活と意識に関する調査」では, 望まない妊娠を防止することが調査の目的としてあるため, セックスの経験等についての問いが, 調査を重ねるなかで異性とのセックスに限定されるようになったことを指摘した(4-5)。

もちろんこのような異性愛の前提は, 質問を作成する際, 無意識なものではない可能性もある。4-1で異性愛が前提とされていることに関して, Durso と Gates (2013) の指摘を示

した。彼らは、セクシュアルマイノリティのデータを収集するための方法を提示しているが、むしろ誤検出を生じさせないために「デフォルト」として見られがちな異性愛の組み合わせを選択肢の最初に持つてくることで誤検出を防止することを推奨していた。このことについて、さらに Durso と Gates は、しばしば性的マイノリティは人口の5%未満を占めることを考えると、そのようなデータに取り組む際、誤検出問題を常に考慮すべき (Durso and Gates 2013: 38) という。誤検出問題は、大きな集団 (large population) の人の誤りによって、個人が非常に小さな集団 (very small population) に誤分類される可能性がある場合に発生する (Durso and Gates 2013: 38) と指摘する。

つまり、異性愛が前提とされていたことは、今までの調査から5%未満と非常に少ないとされている性的マイノリティの人々を、より正確に把握するための一つの技法とも考えられる。

5-2 継続的な調査における変化

第2の論点は、日本の調査における変化である。日本の調査において、LGBTや性的マイノリティに関する質問は、全体の質問項目のなかの一部であった。各調査では30問から50問程あり、そのうち関連する質問は毎回2問程であった。ここでは、改めて調査の年代ごとに日本の「青少年の性行動全国調査」と「男女の生活と意識に関する調査」におけるLGBTや性的マイノリティに関する質問を整理し、各調査における変化を見ていく。

総理府の1971年の「青少年の性意識調査」と日本性教育協会の1974年から2011年の「青少年の性行動全国調査」においてLGBTに関する質問は大きく6つあった。1971年の総理府の「青少年の性意識調査」では、①男であること、女であることに気づいた年齢(4-3)という質問があった。続いて、1974年の第1回「青少年の性行動全国調査」では、②性的ないたずらをした人が「同性」か「異性」かという質問(4-7)が登場するも、この質問は第1回調査のみであった。また、1974年の第1回調査では、③同性にたいして性的魅力を感じたことがあるかという質問(4-1)と④同性の人と過去に身体接触をしたことがあるかもしくは現在も身体接触をしているかという質問(4-4)が登場した。この質問は、1974年の第1回調査から1993年の第4回調査まで継続して聞かれるが、1999年の第5回からこれらの質問はなくなった。

一方、第5回調査から、新たな質問が登場した。⑤「同性と性的行為をすることがあってもかまわない」という意見についてどのように考えるかという質問だ(4-5)。これは1999年の第5回調査から最新の調査である2011年の第7回でも続いているが、2005年の第6回調査のみ中学生調査では対象外の質問であった。2011年の第7回調査では、⑥性について知りたいことを答える質問のなかの選択肢として「性的マイノリティ(同性愛者、性同一性障害など)」が初めて登場した(4-5)。

この調査の変化を以下のようにまとめることができるだろう。第1回の1974年から2011年まで、同性愛に関する質問は継続的にあった。1974年から1993年の調査では、同性愛に

関する性的魅力や性行動について聞かれる。これらは、回答者の性についての経験を聞くものであった。一方、1999年から2011年では「同性と性的行為をすること」についての回答者の意識が聞かれることになる。「性に関する経験」から「性に関する意識」へとシフトする。2005年の調査から、調査全体としても変化があり、中学生と高校生以上では質問項目が異なるものとなった。そして、2011年から性について知りたいこととして、同性愛以外に初めて「性同一性障害」が登場した。その他、「男であること、女であることに気づいた年齢」は1971年の総理府のみ、同性からの「性的ないたずら」は1974年の第1回調査のみに登場した。

一方、2002年から2014年に実施された「男女の生活と意識に関する調査」では、LGBTに関連する質問としては1問であり、ほとんど変化することはなかった。しかしながら、「性行為の経験」については、2008年の第4回調査から「異性愛」に限定されるという変化があった。

5-3 性の調査におけるトランスジェンダーの人々

第3の論点は、アメリカと日本の3つの調査において、トランスジェンダーや性同一性障害の人々の性意識や性行動を捉える質問は、同性愛や両性愛に関する質問に比べて少なかった。例えば「男であること」、「女であること」に気づいた年齢(4-3)という質問があった。また、性について知りたいことや知るべきこととして「性同一性障害」が登場していた(4-5)。しかしながら、これは、性同一性障害に関する意識についての質問であり、例えば性同一性障害の回答者が実際に経験したことを聞いているわけではない。また、自分のアイデンティティを尋ねる質問の選択肢は同性愛者や両性愛者等でトランスジェンダーやその他のセクシュアリティをあらわすアイデンティティはなかった(4-2)。そして配偶者、パートナー、同棲相手の性別として「男」と「女」以外の選択肢はなかった(4-6)。その他、3つの調査におけるLGBTに関する質問は、主に同性愛や両性愛についての質問であった。

今回、実際の質問紙の分析はできなかったが、アメリカの2009年の性の調査である「国民性健康性行動調査」(NSSHB)では、「性的指向」として「ヘテロセクシュアル/ストレート」、「ホモセクシュアル/ゲイ/レズビアン」、「バイセクシュアル」、「エイセクシュアル」、「その他」とある(Herbenick et al. 2010: 257)。注目すべきは、「エイセクシュアル(Asexual)」があることだ。「エイセクシュアル」は、好きになった相手を性的対象とはみなさないひとびと(東 2013: 186)をあらわすことばである。しかしながら、この2009年の調査においても「トランスジェンダー」は見当たらなかった。

4-2で示したように、トランスジェンダーの回答者からも性的指向のデータを収集することが必要であるという指摘があり、またトランスジェンダーの人々を捉えるための質問項目の設定では、さまざまなアプローチが推奨もしくは、実際の調査において採用されていた。今回分析した3つの質問紙調査において「トランスジェンダー」のセックス(性行為)については焦点が置かれていなかったと言える。このことから、セックスに関する調査において

も「トランスジェンダー」を特定する質問について検討が必要であろう。

6 おわりに

本稿では、3つの大規模質問紙調査に見られた性的マイノリティやLGBTに関連する質問を検討した。その結果、「性的魅力」、「性的指向」、「性自認」、「性行動」、「性についてどう考えるか、性について知りたいこと」、「配偶関係、パートナーシップ関係、同棲関係」、「性的ないたずら」、「挿入する側、挿入される側」という8つの代表的な類型が見出された。そのなかで、質問紙自体が、異性愛的な考え方を暗黙の前提として作られている可能性、日本の調査における変化、同性愛に比べてトランスジェンダーに関する質問が少ないことを指摘した。今後の課題として、今回取り上げなかった性についての質問紙調査についても、質問項目を検討する必要があるだろう。他にも、アメリカや日本以外の性の調査やLGBTや性的マイノリティを対象とした調査も見ていく必要がある。

注

- (1) 例えば、小学生、中学生、高校生を対象とした「児童・生徒の性」実態調査を1981年以降、3年おきに行っていた「東京都幼・小・中・高心性教育研究会」では、「最近の性教育に対する風評被害の影響で実態調査の協力・理解が困難な状況の中、2008年以來6年ぶりの調査結果がまとまった」（東京都幼・小・中・高心性教育研究会 2014: 1-6）と言及している。
- (2) Reissの研究を受けて、Coulter (1979=1988)は「男性性器を口に含む」という仕草を例にあげ、一定の活動が当人たちの間でまったく異なる意味を持つことを指摘する。「男性性器を口に含む」という物理的仕草は、ゲイバーで知り合った2人の男性の間でなされる場合と、公衆便所で金銭の受け渡しを前提に非行少年と大人の同性愛者の間でなされる場合では、同じ仕草であっても、「同じこと」をしていることにはならない。非行少年たちにとって、「オーラルセックスの手伝い」と「記述」されることに抵抗はないかもしれないが、「同性愛的なフェラチオをやっている」と記述された場合には、「男らしくあろう」というイメージに反するのではないかという(Coulter 1979=1988: 24)。このように、同じ仕草、見た目の行為は同じであっても、金銭の授受がないセックスと金銭の受け渡しのある関係では、まったく違う意味を持つということが明らかにされた。
- (3) さまざまな反省から、現在では性的マイノリティについての質的調査のガイドラインとして例えば「クィア領域における調査研究にまつわる倫理や手続きを考える：フィールドワーク経験にもとづくガイドライン試案」（溝口他 2014）がある。
- (4) その他、新聞記者である杉山麻里子（2016）によるアメリカと日本の同性カップルの子どもについてのルポルタージュ『同性カップルの子どもたち—アメリカ「ゲイビーブーム」を追う』がある（杉山 2016）。杉山は、アメリカにおいて代理出産で子どもを迎えたゲイカップルや精子提供や養子縁組によって子どもを迎えたレズビアンカップルなどに対するインタビューを実施した。
- (5) LGBTに関する人口統計については、『*International Handbook on the Demography of*

- Sexuality*』を参照したい (Baumle, A. K. ed. 2013)。
- (6) Ericksen と Steffen (1999) によると、1892年にウィスコンシン大学の生物学の大学院生である Clelia Mosher によってアメリカ人の性行動についてのサーベイが初めて実施された (Ericksen and Steffen 1999: 28-30)。対象は、上流中産階級の既婚女性であった。
- (7) 調査の結果は、『セクシュアリティの社会組織——アメリカにおける性実践』(Laumann et al. 1994) と『セックス・イン・アメリカ——はじめての実態調査』(Michael, R. et al. 1994=1996) の2冊にまとめられている。
- (8) この調査では、さまざまな調査ツールが使用された。経験豊富な専任の面接員から回答者に渡された120ページを超える質問紙のほか、16枚の小さなカードや、さらに小さな4枚の「親展」自記式質問紙 (SAQ: Self-Administered Questionnaire)、大きめの「生涯年表」(Life History Calendar) 等である (Michael, R. et al. 1994=1996: 339)。この調査の面接員は220人いた。
- (9) 男性同士の性行為では、18歳から59歳の男性の間で、4.8%から8.4%が他の男性から過去1年以内にオーラルセックスを受けた。また一方、40歳から49歳の13.8%と50歳から59歳の14.9%は生涯の行動としてオーラルセックスを受けることが見られた。過去1年以内では、18歳から59歳の4.3%から8.0%の男性が、他の男性にたいしてオーラルセックスをすることが見られた。一方、18歳から19歳、40歳から49歳、50歳から59歳の年齢のグループの10%を超える男性は、この行動に生涯において携わっていた。ペニスとアナルのセックスの受容は、相対的に少ない行動として報告された (過去1年以内に、すべての年齢グループにおいて6%より少ない男性)。生涯における、アナルセックスの受容は、20歳から24歳 (10.8%)、40歳から49歳 (8.5%)、50歳から59歳 (9.5%) の男性の間で最も一般的であった。女性同士の性行為では、過去1年以内に女性のパートナーからオーラルセックスを受けたのは、ほとんどの年齢グループにおいて5%未満の女性に見られた。例外として、過去1年以内に20歳から24歳の8.5%の女性はオーラルセックスをすることが見られた。16歳から49歳の2.0%から9.2%の女性は、過去1年以内に他の女性にオーラルセックスをすることが見られた (Herbenick et al. 2010: 258-259)。
- (10) その後、総理府は1974年に「青少年の生活と、性情報など社会的要因との関連についての調査」も実施している (日本性教育協会 1975: 7)。
- (11) 実際、1974年から2011年の調査結果のうち「デート経験」、「キス経験」、「性交経験」のレビューを行った片瀬は、約40年間の青少年の性行動の変容として「性行動の日常化」と「性行動の分極化」を挙げている (日本性教育協会 2013: 14-24)。「日常化」とは、性が「特別なもの」ではなくなったため関心も低下するという日常化のことであり、「分極化」とは、対人的コミュニケーションが活発な層では性行動も活発化しているが、「不活発層」は恋人もなく性交経験もなく、性行動は分極化していくということだ。
- (12) 2016年10月から11月にかけて第8回調査が実施された。
- (13) 5つのジャーナルは、『*Journal of Sex Research*』、『*Archives of Sexual Behavior*』、『*Family Planning Perspectives*』、『*Journal of Marriage and the Family*』、『*American Journal of Public Health*』 (Ericksen and Steffen 1999: viii)。

LGBTについてどのような質問がなされてきたのか

- (14) 女性に対する質問項目についても、男性版『*Sexual Behavior in the Human Male*』を参照することと女性版『*Sexual Behavior in the Human Female*』の59ページの注 (Kinsey et al. 1953: 59) にある。
- (15) 彼らはこの3つの側面を以下のように定義づけている。「性的魅力」については「ある人が魅力を感じる個人の性別 (セックスもしくはジェンダー)」、 「性行動」については「個人のセックスパートナーの性別」、 「自己の同定」については「人が自身の性的指向をどのように同定するか」としている。
- (16) 伊藤 (2013) は、「性的指向性」を「性的な興味、関心、欲望の対象が異性、同性、あるいは両性のいずれに向いているかという指向性」としている (伊藤 2013: 94)。
- (17) 伊藤 (2013) は、「中核性同一性」もしくは「性自認」を「自分が女あるいは男であるということについての確固とした自己認知と基本的確信」としている (伊藤 2013: 94)。
- (18) Durso と Gates (2013) は、「性行動」について推奨される質問として紹介していることを断っておきたい。
- (19) 「国民健康社会生活調査」の質問紙の内容について言及したい。回答者が答えるものはセクション1からセクション10までである。セクション1は「人口統計」、セクション2は「結婚と同棲者」、セクション3は「生殖能力」、セクション4は「パートナーの同定と1年間の性活動」、セクション5は「最近の性体験について」、セクション6は「生涯の性行動」、セクション7は「空想」、セクション8は「小児期、青年期、性的ないたずらの被害」、セクション9は「身体の健康状態」、セクション10は「態度」である。セクション11もあるがこれは「インタビュアーのコメント」というセクションであり、調査者であるインタビュアーが対面インタビュー時の回答者の様子などについて記入するものだ (Laumann et al. 1994: 668)。
- (20) 選択肢には「ヘテロセクシュアル」と「ノーマル/ストレート」が別の選択肢としてある。なぜここに、この2つがあるのかということについては現状わからない。その上で、当時それぞれ異なる意味があったかについては、今後の検討課題となる。
- (21) Scout の尺度については『*LGBT Surveillance and Data Collection Briefing Paper*』 (<http://www.lgbttobacco.org/files/SurveillanceBriefingPaper05.pdf>) を参照したい。
- (22) 「性的マイノリティについての意識 2015 年全国調査」 (釜野他 2016a) では、性自認について以下のような質問がある。「戸籍上の性別 (男、女)」、「ご自分の性別を、戸籍上の性別と同じだと認識していますか (はい、いいえ)」、「あなたご自身の認識にもっとも近いもの (男、女、その他、自由記述)」。また、性的指向については「あなたはご自身を、異性愛者 (異性だけに恋愛感情を抱いたり性的に惹かれたりする人) だと思いますか (はい、考えたことがない、いいえ)」、「あなたご自身の認識にもっとも近いものに○をつけてください (同性愛・ゲイ・レズビアン、両性愛・バイセクシュアル、わからない、決めたくない・決めていない、その他)」という質問だ。
- (23) 一方、鶴田 (2009) は、トランスジェンダーやトランスセクシュアル、性同一性障害の当事者において、だれが、真の当事者なのかという戸惑いがあることを示している。「性同一性障害は、医療者という権威を持つものによって決定されるものでありながら、その正当性が、当事者間で

独自に争われているという点において、他者執行だとも自己執行だとも言えないような奇妙なカテゴリーとなっている」(鶴田 2009: 148)。「自分がどのカテゴリーだと考えるかという、自己カテゴリー化の問題だとされている一方で、『他者からどう見られるか』でもあるゆえに、他者(医療者や他の当事者、あるいは周囲の人びと)から、どうカテゴリー化されるかという問題でもあるのだ」(鶴田 2009: 14)と指摘する。

- (24) 1971年の総理府の調査では「青少年調査」と「成人調査」があり、この質問は「青少年調査」のものである。
- (25) 例えば、男であること、女であることに気づいた年齢は、インタビューや観察等の質的研究の文脈ではどのような扱いになっているのだろうか。『戦後日本女装・同性愛研究』(矢島編 2006)では、インタビューの質問項目のなかに「性自認・性指向・性嗜好の兆候と自覚化」がある。「女装」をするインタビューーに対しては、例えば「いつごろから『女装』らしきことをしていたか」、「『女の子になりたい(性転換したい)』『女の子に生まれたらよかった』という思いはあったか」という質問が聞かれている。
- (26) 中学生の調査票に含まれなかったのは、性交経験(動機、避妊の実行、これまでの経験人数、性感染症や妊娠の懸念、避妊の方法、避妊を実行しない理由など)、性規範(愛情のない性交、金品授受による性交、恋人以外との性交の態度など)、性的被害におけるデートレイプ・レイズ、性知識(避妊や性感染症などに関する知識)(日本性教育協会 2007: 10-11)。
- (27) 最初に同性パートナーシップを法制化したのは、デンマークの1989年である(青山 2013)。
- (28) Frédéric Martel (Martel 2013=2016)は、アメリカにおける同性結婚を支持する団体の参加者に対するインタビューとフィールドワークを通じて、権利運動を描いている。
- (29) その他の地域においても、同性パートナーに対する取り組みが行われている。現在では、三重県伊賀市、兵庫県宝塚市、沖縄県那覇市。
- (30) LGBTにおけるレイプや性的虐待は、社会学のなかでどのように扱われているのだろうか。大島(2016)は、若年ゲイ男性10名のライフストーリーを通じて「性的冒険主義」を描く。「性的冒険主義」とは「男らしき規範とリスクの伴うセックスとの結びつきによる快楽」である。調査協力者10名のうち4名は、外見や振る舞いが男らしくないという理由でいじめを受け、思春期・青年期に性暴力や望まないセックス等苦悩の経験を有していた。それらの経験が、その後のリスクの伴うセックスにもつながっていることを指摘した。
- (31) 性器を口で刺激すること、つまり、パートナーの性器をなめたり、そこにキスしたりすること、または、パートナーにそうしてもらうこと。
- (32) この質問は、東京や大阪、福岡などにおいて実施されたゲイバーやクラブ調査でも聞かれている。<http://www.msm-japan.com/>を参照したい。

参考文献

青山薫, 2013, 「親密圏と親密権」木村涼子他編『よくわかるジェンダー・スタディーズ——人文社会科学から自然科学まで』ミネルヴァ書房, 212-213.

- Baumle, A. K. ed., 2013, *International Handbook on the Demography of Sexuality*, Dordrecht: Springer Netherlands.
- Butler, J., 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York: Routledge.
(=1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.)
- Coulter, J., 1979, *The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*, London: MacMillan. (=1998, 西阪仰訳『心の社会的構成——ヴァイドゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点』新曜社.)
- Crooks, R. and Baur, K., 2014, *Our Sexuality*, 12th ed., Canada: Cengage.
- DeLamater, J. and Plante, R. F. eds., 2015, *Handbook of the Sociology of Sexualities*, Gewerbestrasse: Springer International Publishing.
- Durso, Laura E. and Gates, Gary J., 2013, “Best Practices: Collecting and Analyzing Data on Sexual Minorities,” Baumle, A. K. ed., 2013, *International Handbook on the Demography of Sexuality*, Dordrecht: Springer Netherlands, 21-42.
- Ericksen, J. A. and Steffen, S. A., 1999, *Kiss and Tell: Surveying Sex in the Twentieth Century*. Cambridge: Harvard University Press.
- Gamson, J., 2013, “The Normal Science of Queerness: LGBT Sociology Books in the Twenty-First Century,” *Contemporary Sociology*, 42(6): 801-808.
- 原純輔・石川由香里・加藤秀一・日本性教育協会, 1997, 『若者の性はいま… 青少年の性行動第4回調査』.
- Herbenick, D., Reece, M., Schick, V., Sanders, S.A., Dodge, B. and Fortenberry, J.D., 2010, “Sexual Behavior in the United States: Results from a National Probability Sample of Men and Woman Ages 14-94,” *The Journal of Sexual Medicine*, 7(5): 255-265.
- 日高庸晴, 2007, 「社会調査から見た性的指向と健康問題」『女性学評論』21: 49-66.
- 東優子, 2013, 「セクシュアル・マイノリティ」木村涼子他編『よくわかるジェンダー・スタディーズ——人文社会科学から自然科学まで』ミネルヴァ書房, 186-187.
- Humphreys, L., [1970] 1975, *Tearoom Trade: Impersonal Sex in Public Places*, Enlarged ed., Hawthorne, NY: Aldine de Gruyter.
- Irvine, J. M., 2003, “‘The Sociologist as Voyeur’: Social Theory and Sexuality Research, 1910-1978,” *Qualitative Sociology*, 26(4): 429-456.
- 伊藤裕子, 2013, 「ジェンダー・アイデンティティ」木村涼子他編『よくわかるジェンダー・スタディーズ——人文社会科学から自然科学まで』ミネルヴァ書房, 94-95.
- 釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也, 2016a 『性的マイノリティについての意識——2015年全国調査報告書』科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループ（研究代表者 広島修道大学 河口和也）編.
- 釜野さおり, 2016b, 「性的指向と性自認（SOGI）を視野にいれた人口学的研究のこれから」第68回

日本人口学会報告原稿.

- 神谷悠介, 2011, 「ゲイカップルにおける家事, 仕事, 愛情のあり方——異性愛家族を対象とした家事分担理論の検討を通じて」『年報社会学論集』(24): 74-85.
- 北村邦夫, 2017, 「結婚しない, セックスしない若者たち——『第8回男女の生活と意識に関する調査』結果から」『現代性教育研究ジャーナル』日本性教育協会, 72: 1-10.
- 木村涼子・伊田久美子・熊安貴美江編, 2013, 『よくわかるジェンダー・スタディーズ——人文社会科学から自然科学まで』ミネルヴァ書房.
- 金城克哉, 2010, 「掘ってくれるタチいないっすか?——沖縄県の出会い系掲示板投稿文の計量的分析」『論叢クィア』(3): 39-61.
- Kinsey, A., Pomeroy, W. and Martin, C., 1948, *Sexual Behavior in the Human Male*, Philadelphia: Saunders. (=1950, 永井潜・安藤画一訳『キンゼイ報告上——人間に於ける男性の性行為』コスモポリタン社.) (=1950, 永井潜・安藤画一訳『キンゼイ報告下——人間に於ける男性の性行為』コスモポリタン社.)
- Kinsey, A., Pomeroy, W., Martin, C. and Gebhard, P., 1953, *Sexual Behavior in the Human Female*, Philadelphia: Saunders. (=1955, 朝山新一・石田周三・柘植秀臣・南博訳『キンゼイ報告女性篇上——人間女性における性行動』コスモポリタン社.) (=1955, 朝山新一・石田周三・柘植秀臣・南博訳『キンゼイ報告女性篇下——人間女性における性行動』コスモポリタン社.)
- Laumann, E., Gagnon, J., Michael, R. and Michaels, S., 1994, *The Social Organization of Sexuality: Sexual Practices in the United States*, Chicago: University of Chicago Press.
- Martel, F., 2013, *Global Gay: Comment la Révolution Gay Change le Monde*, Paris: Flammarion. (=2016, 林はる芽訳『現地レポート世界LGBT事情——変わりつつある人権と文化の地政学』岩波書店.)
- Michael, R., Gagnon, J., Laumann, E. and Kolata, G., 1994, *Sex in America: A Definitive Study*, Boston: Little, Brown. (=1996, 近藤隆文訳『セックス・イン・アメリカ——はじめての実態調査』日本放送出版協会.)
- 溝口彰子・岩橋恒太・大江千東・杉浦郁子・若林苗子, 2014, 「クィア領域における調査研究にまつわる倫理や手続きを考える: フィールドワーク経験にもとづくガイドライン試案」国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会編『ジェンダー&セクシュアリティ』国際基督教大学ジェンダー研究センター, 9: 211-225.
- 森山至貴, 2012, 『「ゲイコミュニティ」の社会学』勁草書房.
- 森山至貴, 2014, 「言語実践に着目したセクシュアリティ研究へ向けて——ゲイ男性が用いるタチ/ネコ, タチ/ウケという用語系に着目して」『ことばと社会——多言語社会研究』(16): 86-107.
- 日本家族計画協会, 2003, 『性に関する知識・意識・行動について——男女の生活と意識に関する調査報告書』.
- 日本家族計画協会, 2005, 『性に関する知識意識行動について——第2回男女の生活と意識に関する調査報告書』.

LGBT についてどのような質問がなされてきたのか

- 日本家族計画協会, 2007, 『性に関する知識意識行動について——第3回男女の生活と意識に関する調査報告書』.
- 日本家族計画協会, 2008, 『性に関する知識意識行動について——第4回男女の生活と意識に関する調査報告書(2008年)』.
- 日本家族計画協会, 2011, 『性に関する知識意識行動について——第5回男女の生活と意識に関する調査報告書(2010年)』.
- 日本家族計画協会, 2012, 『第6回男女の生活と意識に関する調査報告書2012年——日本人の性意識・性行動』.
- 日本家族計画協会, 2015, 『第7回男女の生活と意識に関する調査報告書2014年——日本人の性意識・性行動』.
- 日本性教育協会, 1975, 『青少年の性行動——わが国の高校生・大学生に関する調査報告』小学館.
- 日本性教育協会, 1983, 『青少年の性行動 第2回——わが国の高校生・大学生に関する調査・分析付・障害児の性発達と性行動』小学館.
- 日本性教育協会, 1988, 『青少年の性行動 第3回』.
- 日本性教育協会, 2001, 『「若者の性」白書——第5回青少年の性行動全国調査報告』小学館.
- 日本性教育協会, 2007, 『「若者の性」白書——第6回青少年の性行動全国調査報告』小学館.
- 日本性教育協会, 2013, 『「若者の性」白書——第7回青少年の性行動全国調査報告』小学館.
- 西澤哲, 2010, 『子ども虐待』講談社.
- 大島岳, 2016, 『「性的冒険主義」を生きる——若年ゲイ男性のライフストーリーにみる男らしさ規範と性』『新社会学研究』1: 93-118.
- Reece, M. et al., 2010, “Findings from the National Survey of Sexual Health and Behavior (NSSHB),” *The Journal of Sexual Medicine*, 7(5): 243-373.
- Reiss, A. J., 1961, “The Social Integration of Queers and Peers,” *Social Problems*, 9: 102-120.
- 世田谷区生活文化部人権・男女共同参画担当課, 2016, 『性的マイノリティ支援のための暮らしと意識に関する実態調査報告書』.
- 総理府青少年対策本部, 1972, 『青少年の性意識——青少年問題研究調査報告書』.
- 杉山麻里子, 2016, 『ルポ同性カップルの子どもたち——アメリカ「ゲイビープーム」を追う』岩波書店.
- 東京都幼・小・中・高心性教育研究会, 2014, 「児童・生徒の性に関する調査」『現代性教育研究ジャーナル』日本性教育協会, 45: 1-6
- 鶴田幸恵, 2009, 『性同一性障害のエスノグラフィ——性現象の社会学』ハーベスト社.
- 矢島正見編, 1997, 『男性同性愛者のライフヒストリー』学文社.
- 矢島正見編, 1999, 『女性同性愛者のライフヒストリー』学文社.
- 矢島正見編, 2006, 『戦後日本女装・同性愛研究』中央大学出版部.

ウェブページ

青少年の性行動全国調査, 日本性教育協会ホームページ, (2017年1月24日取得, <http://www.jase.faje.or.jp/jigyo/youth.html>)

National Survey of Sexual Health and Behavior (NSSHB), Indiana University's Center for Sexual Health Promotion, (2017年1月24日取得, <http://www.nationalsexstudy.indiana.edu/>)

性的マイノリティ支援のための暮らしと意識に関する実態調査を実施しました, 世田谷区, (2017年1月24日取得, <http://www.city.setagaya.lg.jp/kurashi/101/167/1871/d00148191.html>)

渋谷区パートナーシップ証明書の交付を行っています, 渋谷区, (2017年1月24日取得, <https://www.city.shibuya.tokyo.jp/est/oowada/partnership.html>)

Frequently Asked Questions: The LGBT Research Trends for Sexual Minorities

Kahori Otsuka

In this paper, I analyzed the content of three large-scale questionnaire surveys, a survey of sex conducted in Japan or in the United States. The purpose of this study was to examine, through the specific questions asked, how sexual minorities or LGBT people's sexual behavior and sexual awareness have been treated inside the sex surveys. As a result, eight representative question types were found: "sexual attraction", "sexual orientation", "gender identity", "sexual behavior", "attitudes about sex", "marital status, partnership status, and cohabitation status", "sexual abuse", and "active and passive". It was found that heterosexuality was presumed when the survey questions were created. I also discovered that there was a shift in continuous surveys, and that fewer questions were asked about transgender than homosexuality.

Keywords: sex survey, sexuality of LGBT, sexuality, social research, questionnaire survey

